

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

明治37年、日露戦争最大の激戦は要衝である旅順をめぐるものでした。バルチック艦隊が極東の海域に向かっており、旅順港のロシア旅順艦隊と合流すると日本にとって致命的となるため、旅順を攻略し、港の艦隊を陸から破壊する必要があります。しかし、ロシアの要塞は高台に25kmに及ぶコンクリートで防御され、どんな強敵でも3年は陥落しない半永久要塞と言われたもので、率いるはアナトリー・ステツセリ陸軍中將でした。これに対し、攻める大將は乃木希典(ノギマレスケ)将軍でした。

日本は5ヶ月間、1万2千85名の大きな犠牲(乃木の息子を含む)を払い要塞を陥落させ旅順艦隊を破壊しました。ロシアも8千96名の死者をだしました。

※司馬遼太郎の「坂の上の雲」には乃木将軍が愚将のように描かれていますが、当時の多くの資料から事実誤認が多く、史実と異なることが知られています。

降伏の会見にあたり、明治天皇から、ステツセリの武人としての名誉を保つよう指示されていた乃木将軍は、アメリカの従軍映画技師からの撮影の申し入れに対し、“敗者が後世まで恥を残すようなことは武士道精神が許さない”として断り、“会見が終わり、友人として並んだところならよい”、として撮影されたのが下の写真であり、戦争の常識とは異なる、敗者が帯刀正装し、まるで同盟国の記念写真のような奇妙なもので世界を驚かせました。

また、散逸しているロシア兵の死骸を一ヶ所に集め、氏名が分かるように吊うことを提案すると、ステツセリは大変驚き、喜びました。

その後、ステツセリはロシアの軍法会議で旅順陥落の責任を問われ、銃殺刑を言い渡されますが、それを知った乃木将軍はロシア皇帝に助命の嘆願書をだし、またヨーロッパの新聞にステツセリの勇敢な戦いを投稿し世論喚起をおこないました。その結果、シベリア流刑に減刑され、そのあいだ乃木将軍は妻子の生活が困窮しないよう、匿名で送金を続けました。

戦争がおわり、明治天皇に拝謁し、多くの兵士を失わせた罪をつぐない、自刀の許しを請う乃木将軍に対し、死んではいけない、どうしても死ぬというなら朕が世を去ってからにせよ。と言われます。

明治40年、明治天皇に、君は戦争で子供を失ったから、たくさんの子供をあげよう、と言われ、学習院院長になります。月に一、二度しか帰宅せず、宿舎で子供たちと寝食を共にし、大変慕われました。明治41年、昭和天皇が入学し、赤坂御所から車で送り迎えされていましたが、“今後は歩いて通学をなされませ”、と乃木将軍から言われ、以後ずっと天候の悪い日も歩いて通学をなされました。後年、人格形成において乃木将軍から大きな影響を受けたと昭和天皇は語っています。



明治38年1月5日 旅順降伏会見

明治45年大正元年、明治天皇崩御の大葬の日の夜、妻静子夫人とともに自刀して亡くなりました。その後、“モスクワの一僧侶より”とだけ記された弔慰金が送られてきました。

現在、金沢学院大学にステツセリのピアノが保管されています。旅順陥落の際に乃木将軍に贈られたもので、その後旅順で最大の戦死者をだした金沢第9師団に譲られたものでした。